

# 錦町第一遺跡



1996. 3  
財団法人 米子市教育文化事業団



## 例　　言

1. 本書は平成7年度において財団法人米子市教育文化事業団が実施した、鳥取県米子市錦町第1遺跡にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 調査の組織は下記の通りである。

調査委託　　米子市

調査主体　　財団法人米子市教育文化事業団

調査担当　　平木裕子（米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室調査員）

調査協力　　米子市福祉事務所並びに工事関係者

　　　　　　米子市教育委員会

3. 出土遺物は米子市教育委員会で保管している。

4. 本書の編集及び執筆、図面の浄書等は米子市教育文化事業団がこれを行った。

5. 本発掘調査に関して、下記の方々から助言、指導をいただいた。感謝いたします。

中西靖人（財団法人大阪府文化財調査研究センター）

江浦　洋（同上）

赤木三郎（鳥取大学教育学部教授）

井上貴央（鳥取大学医学部教授）

鳥取県埋蔵文化財センター

## 目　　次

I　はじめに .....	2
II　遺構について .....	5
畠　　跡 .....	5
井　　戸 .....	6
溝　状　遺　構 .....	11
柱　　穴 .....	11
玉造り工房跡 .....	11
古　　墳 .....	13
土　器　溜 .....	16
III　遺物について .....	17
IV　小　　結 .....	31

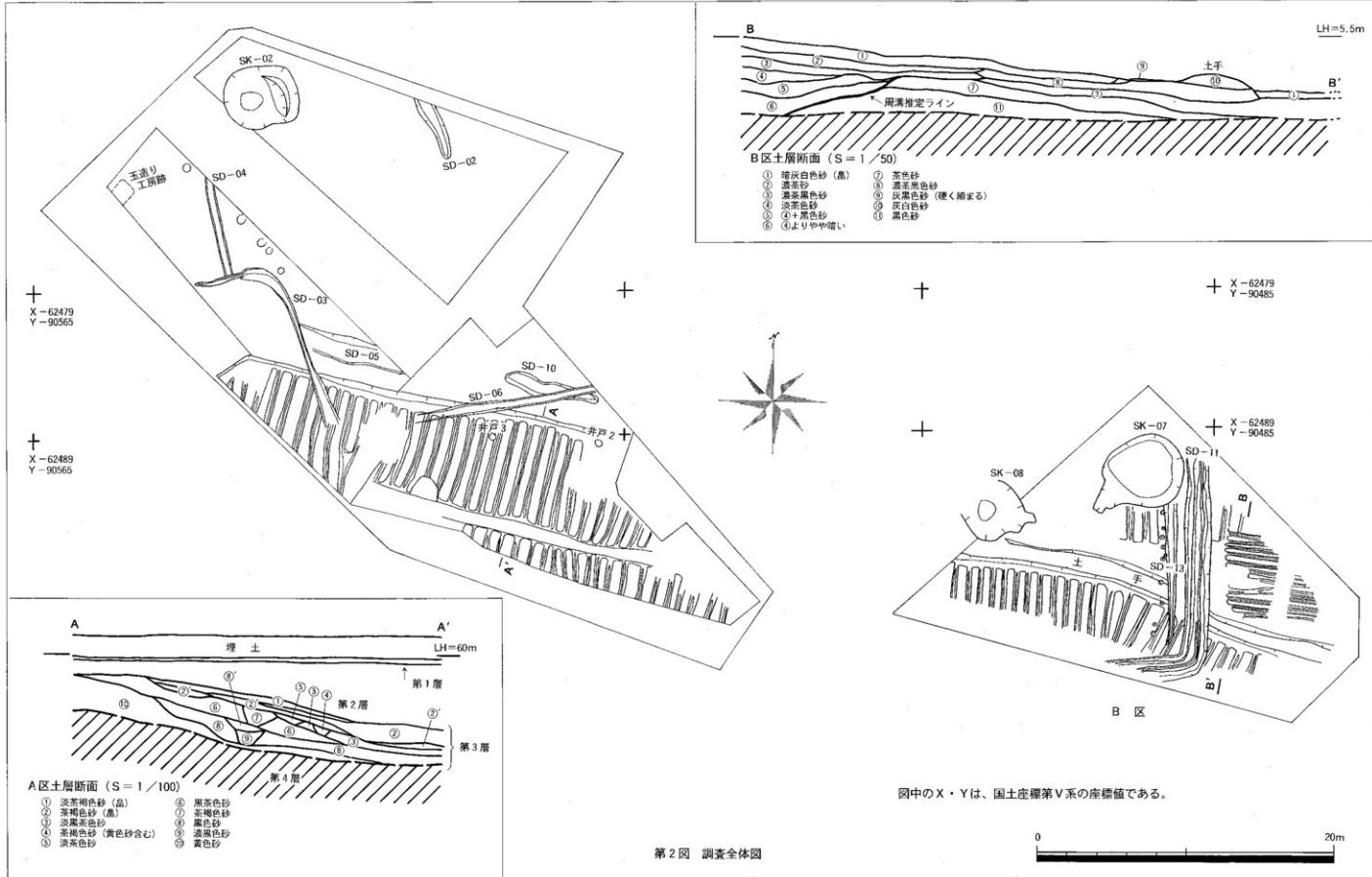


第1図 調査位置図

## I はじめに

錦町第1遺跡の調査地は、米子市錦町1丁目139-1番地に位置する。今回の発掘調査は米子市福祉保健総合センター新築工事に伴うもので、現地調査は平成7年5月15日から同年8月19日まで実施、平成8年3月末まで整理作業をおこなった。調査面積は約1,000m<sup>2</sup>である。

調査地は米子駅から北北西方向に約1.4kmの所に位置し、市街地の中である。以前は米子西高等学校のグラウンドであり、それ以前は桑畠であったところである。現在の標高は約6.5mの平坦地で、現地表下約60cmは現代の埋立土で覆われ、それ以下が旧地層となる（第2図参照）。第1層褐色砂層は江戸時代から明治時代頃の堆積層と思われ、現在と同



様にはほぼ平坦地であった。第2層灰白色砂層は江戸時代以前の飛砂による堆積で、旧地形である斜面に沿って60cmから150cmの堆積があった。しかしながら、この層はほとんど砂の移動がみられないことからほぼ一時期に埋まったと考えられる。第3層黒褐色砂層は弥生時代から室町時代の層で、この層の上面では畠跡、層中から弥生土器、土師器、須恵器など多量の遺物を確認した。第4層黄白色砂層では今回の調査では遺構等は確認できなかった。以上のように、この地は古代からずっと砂丘地であり、この事は以前の海岸線が調査地の北東約200mのJR境線付近まで迫っていたと推定されていることからも窺われる。

周辺は市街地になっているため、あまり遺跡の調査は進んではないが、角盤町遺跡・四日市町遺跡、少し離れてはいるが米子城跡2などで弥生時代の遺跡が確認されている。

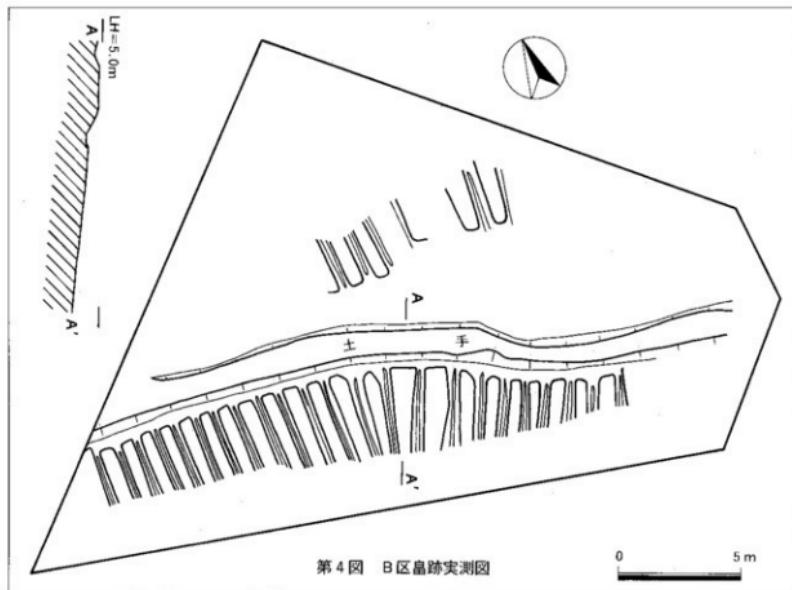
調査の結果、江戸時代の浜井戸3基・井戸2基・溝状遺構、12~13世紀の畠跡、古墳、玉造り工房跡、柱穴等を検出した。

## II 遺構について

1 畠 跡（第3・4図） 畠跡はA区で一か所、B区で二か所検出した。A・B区の広い範囲で確認された畠跡は同じ時期のものと思われるが、B区の比較的上層で確認された畠跡は、近世から現代の新しい時期のものと思われる。

A区では砂丘頂部から南側斜面のやや下がったところに平坦地を設け、そこから高さ40cmの段を施し、風を遮るようにして斜面に沿って畠を形成している。畠はほぼ北北西方に向走り、長さ約7m・幅70cm・溝の下から畠の頂部までの高さ20cm・溝の幅約30cmで、途中畠と直行する東西方向に幅1mの道を作り、さらに南側にも畠を作っている。この南側の畠は北側と比べ雑で、畠の方向や幅が一定していない。畠道は堅くしまっており、畠の下からも同様な堅くしまった道の痕跡を確認した事から、何度も作り直したようである。また、畠は、土層断面の観察によると、クロスナを基本としてつくられているが、灰白色砂の層もみられ、適宜、畠の管理がおこなわれたことが窺われる。その他、畠を横切るように西から東に向かって牛の歩いた足跡も残るが、この跡は農作業中のものではなく、農閑期のものであると考えられる。

B区では第1層褐色砂層においても畠跡を確認している。この畠跡は畠の方向は東西方に向走り、畠の幅40cm、溝の幅20cm、溝のそこから畠の頂部までの高さ10cm弱である。分析の結果イネは検出されたが少量である事から、イネ以外の作物の栽培が考えられるが、不明である。第3層黒褐色砂層で確認された畠跡はA区で確認されたものとはほぼ同時期のものと思われる。斜面傾斜がA区より緩やかなためか、斜面の途中に高さ20cm・幅1.5mの土手を築き、その南側に斜面に沿って畠を形成している。A区と同様畠はほぼ北北西方に向走る。畠の長さは不明だが、A区とほぼ同じと思われる。この畠跡もA区南側と同様畠の方向・幅が一定していない。A区とB区の繋がりが明確ではないが、A・B区の畠跡がそれぞれ独立したものとは考えにくく、時間的差も考えられない。また、B区の土手の



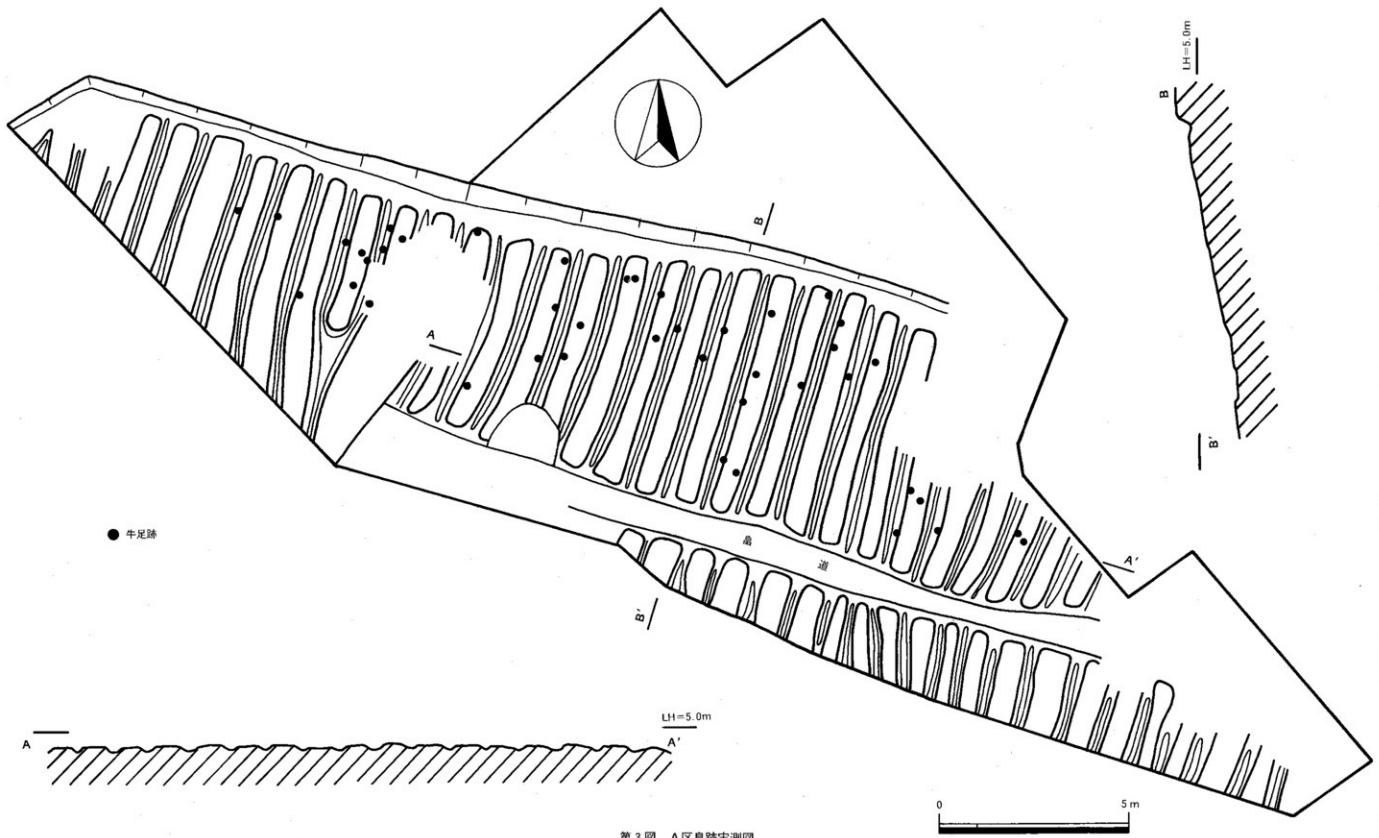
第4図 B区畠跡実測図

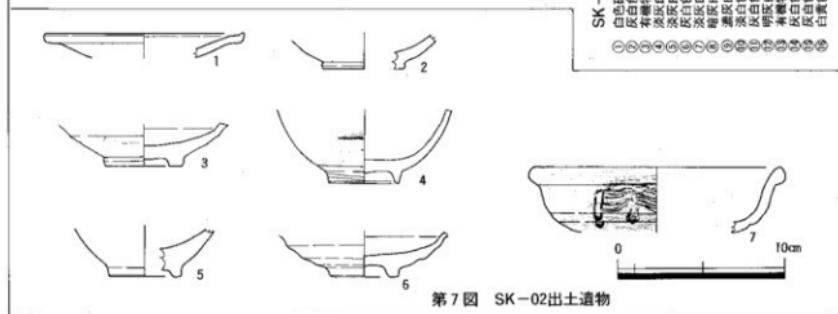
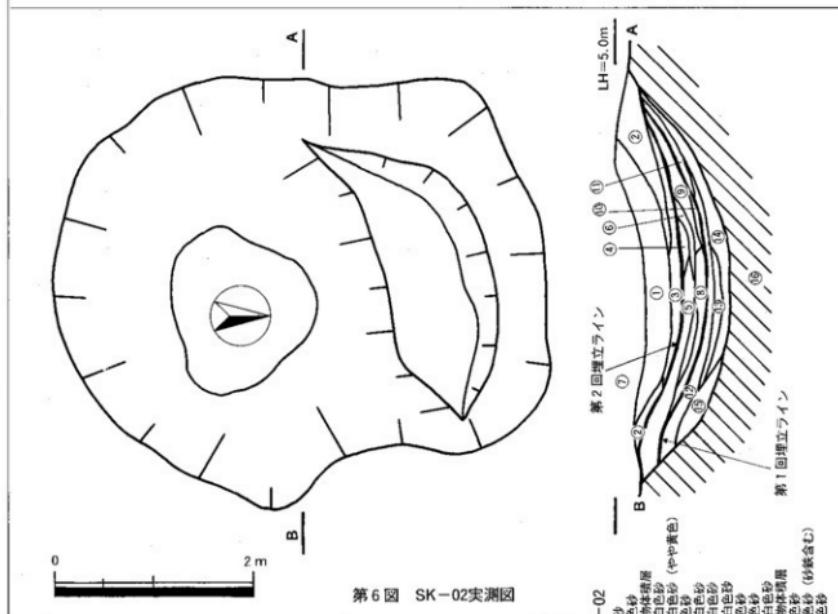
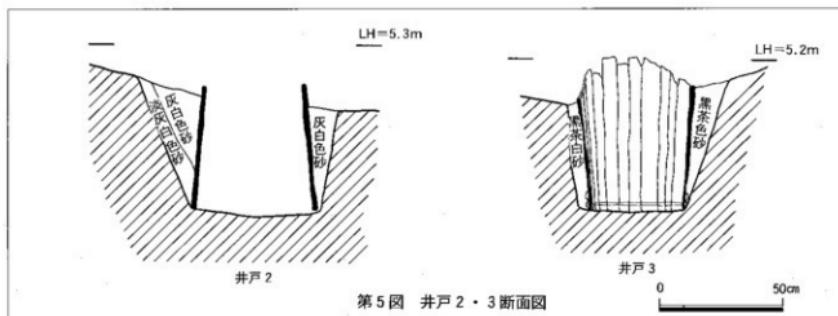
下からA区の畠道と同様な堅くしまった道上のものを確認し、土手の北側においても僅かに畝の高まりを確認していることから、もともとはA・B区共に道を挟んで北と南側に畝があった。しかしながら何かの理由によって（おそらく飛砂の影響と思われるが）、B区北側の畝が使用できなくなり、土手を作ることにより南側のみが放棄されるまで使われていたのではないだろうか。

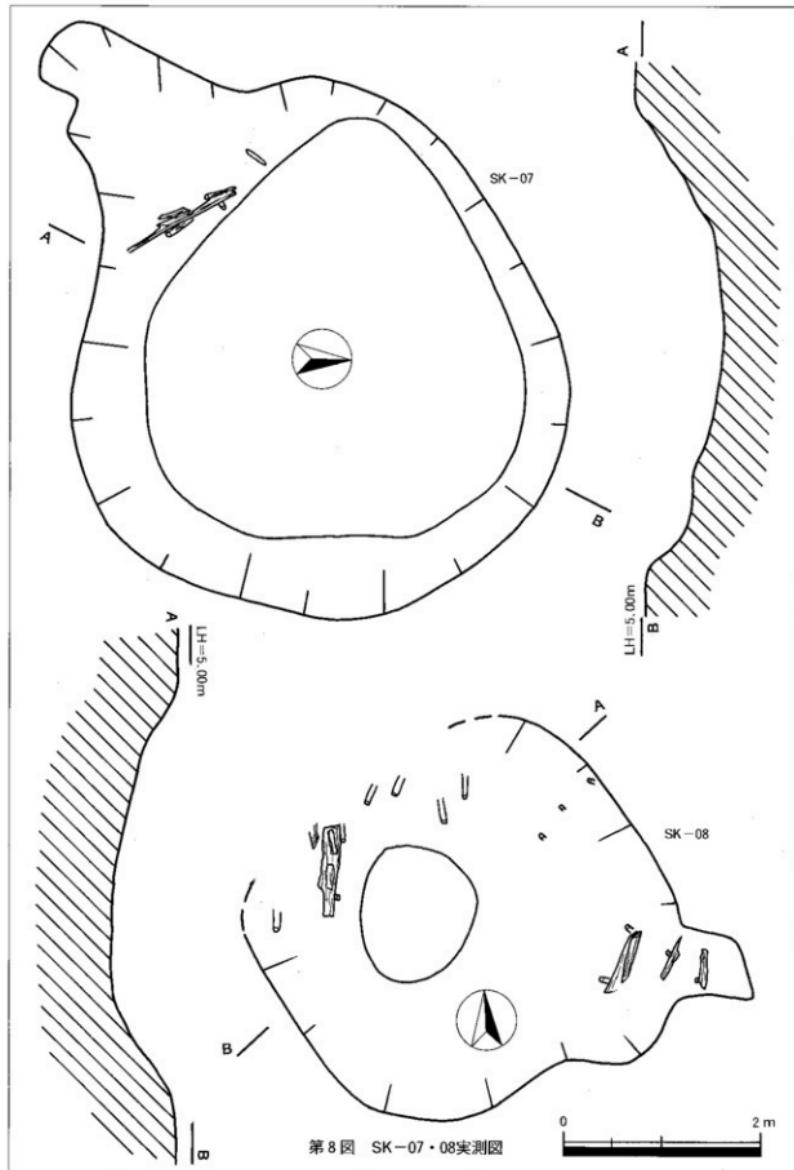
畠で何が栽培されていたのか、畝の方向の違い、道の北側と南側等場所の違いなどで栽培の種類が違うのか土壤分析を行った。分析の結果イネが多く見られ、陸稲を栽培していたと思われるが、イネ以外にもヒエやハトムギなども栽培されていた可能性も考えられるが、全体的に同じような結果であった。

**2 井 戸 (第5・6・8図)** 江戸時代の井戸を5基検出した。うち井戸2・3は桶を流用したもの、SK-02・07・08は浜井戸と呼ばれる素掘りのものである。

井戸2は径約0.8m・深さ5.5mの掘り方が残り、中に口径48cm・底径40cm・高さ50cmの桶が逆さまに据えられていた。井戸3は径6.5m・深さ5.4mの掘り方が残り、中に口径48cm・底径38cm・高さ63cmの桶が据えられていた。SK-02は径約5×4.3m・深さ1.4mで、土の堆積状況をみると大きく2度にわたって埋められているが、あまり時期差は無いようである。SK-07は径5.5×5.1m・深さ1m、SK-08は径約4m・深さ0.7mの擦鉢状の素







掘りのもので、SK-07の南西部・SK-08の東部には水際まで行けるように、平板と杭で階段状の施設が設けてある。またSK-08には柵があったのか杭列も検出した。

時期は中にあった遺物から18~19c頃と思われる（第7図）。

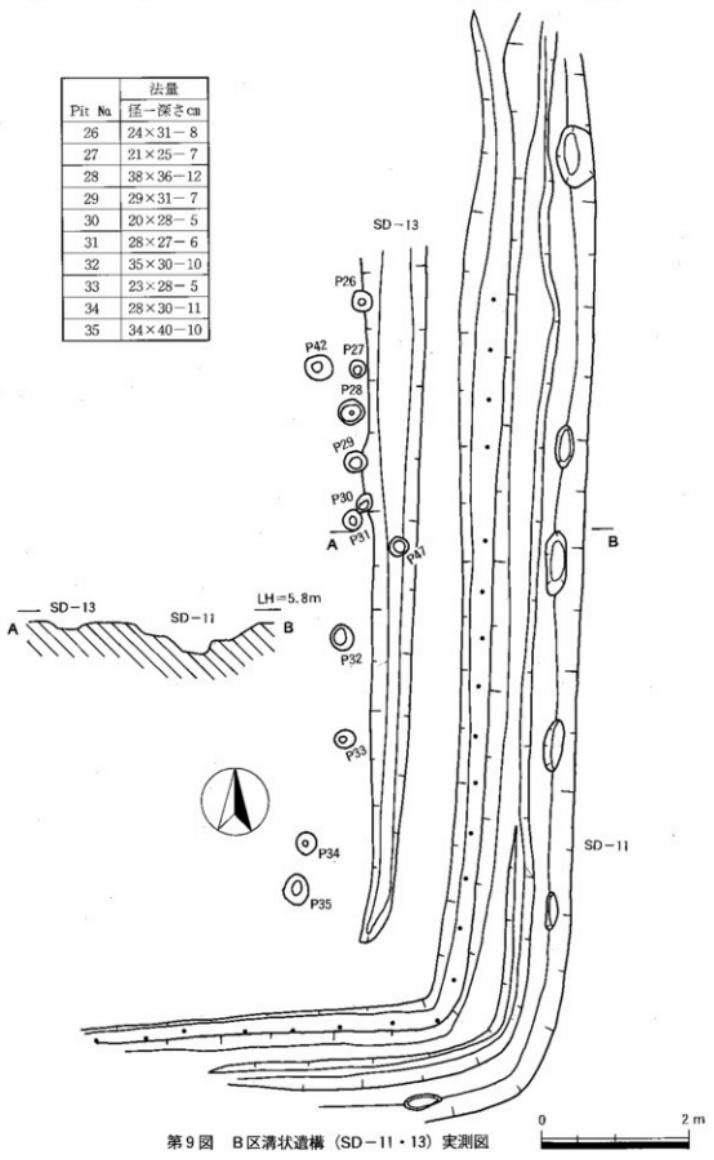
### 3 溝状遺構

- SD-02 A区で検出。南北方向に流れ、北端は調査区外に流れ、幅90cm・深さ10cm。
- SD-03 A区で検出。僅かに彎曲して南端は自然消滅し、東端は調査区外に流れる。幅50cm・深さ22cmの規模は小さいが、上部から10cmのところに幅12cmの段を有す。
- SD-04 A区で検出。東西方向に流れ東端はSD-03に繋がり、西端はトレンチ内で消滅していたのか検出できなかった。幅55cm・深さ15cmで、北側のみ上部から8cmのところに段を施す。
- SD-05 A区で検出。島の土手の上で土手と平行してほぼ東西方向に流れる溝を検出した。島の灌漑施設の可能性も考えられるが明確ではない。幅150~160cm・深さ12cmである。
- SD-06 A区で検出。ほぼ東西方向に流れる。幅70cm・深さ12cmである。
- SD-07 A区 SD-05の下で検出。ほぼ東西方向に流れる。幅35~40cm・深さ10cmである。
- SD-09 A区で検出。ほぼ東西方向に流れ、幅35cm・深さ10cmである。
- SD-10 A区で検出。ほぼ東西方向に流れ、幅90cm・深さ20cm。溝というより土壤に近い。
- SD-11（第9図） B区で検出し、今回の調査で検出した溝の中で、もっともしっかりとしたものである。逆「L」字型に屈曲し、両端は調査区外に流れる。幅1.7m前後・深さ45cmで、上部から30cmのところに幅20~40cmの段を両側に施す。西側の段には約65cm間隔で杭が残り、柵があったと思われる。
- SD-12 B区で検出。ほぼ南北方向に流れ、幅35cm・深さ12cmである。
- SD-13 B区で検出。ほぼ南北方向にSD-11と平行する形で流れる。幅80cm・深さ15cmである。
- SD-14 B区で検出。SD-15の北側に平行して走りほぼ東西方向に流れる。幅40cm・深さ15~20cmである。
- SD-15 B区で検出。SD-14の南側に平行して走る。ほぼ東西方向に流れる。幅45cm・深さ25~30cmである。

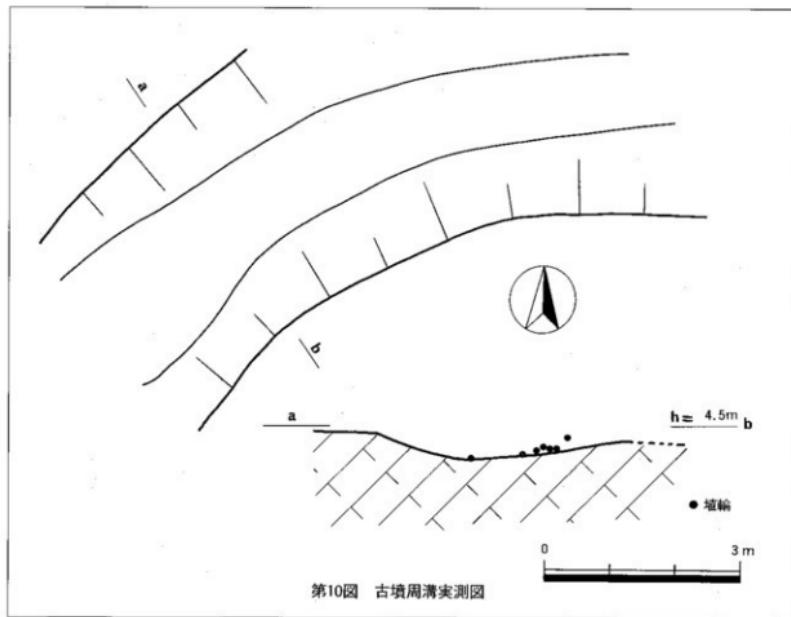
4 柱 穴 A・B区共に幾つかの柱穴を検出したが建物になるものはなかったが、B区 SD-13の西側に溝に沿って幾つか並ぶものはあるが明確なことは分からなかった。

5 玉造り工房跡 A区で検出。1m四方に渡って緑色凝灰岩のチップが散乱していたた

Pit No	法量
	径-深さcm
26	24×31-8
27	21×25-7
28	38×36-12
29	29×31-7
30	20×28-5
31	28×27-6
32	35×30-10
33	23×28-5
34	28×30-11
35	34×40-10



第9図 B区清状構造 (SD-11・13) 実測図



第10図 古墳周溝実測図

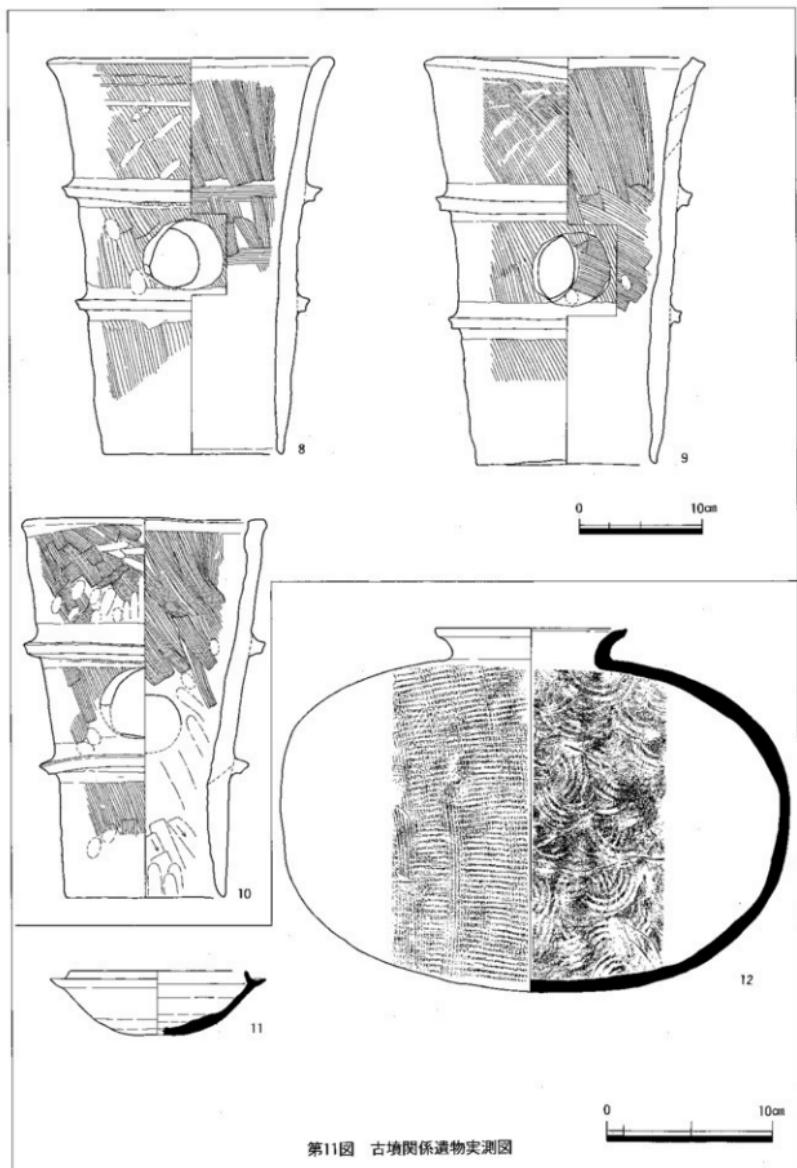
め、この地で玉造りを行い、工房跡があったと考えられる。周囲に柱穴等を探したが、確認は出来なかった。検出地が調査地の端であり、調査区域外にひろがる可能性も考えられる。

## 6 古 墳 (SX01) 第10図

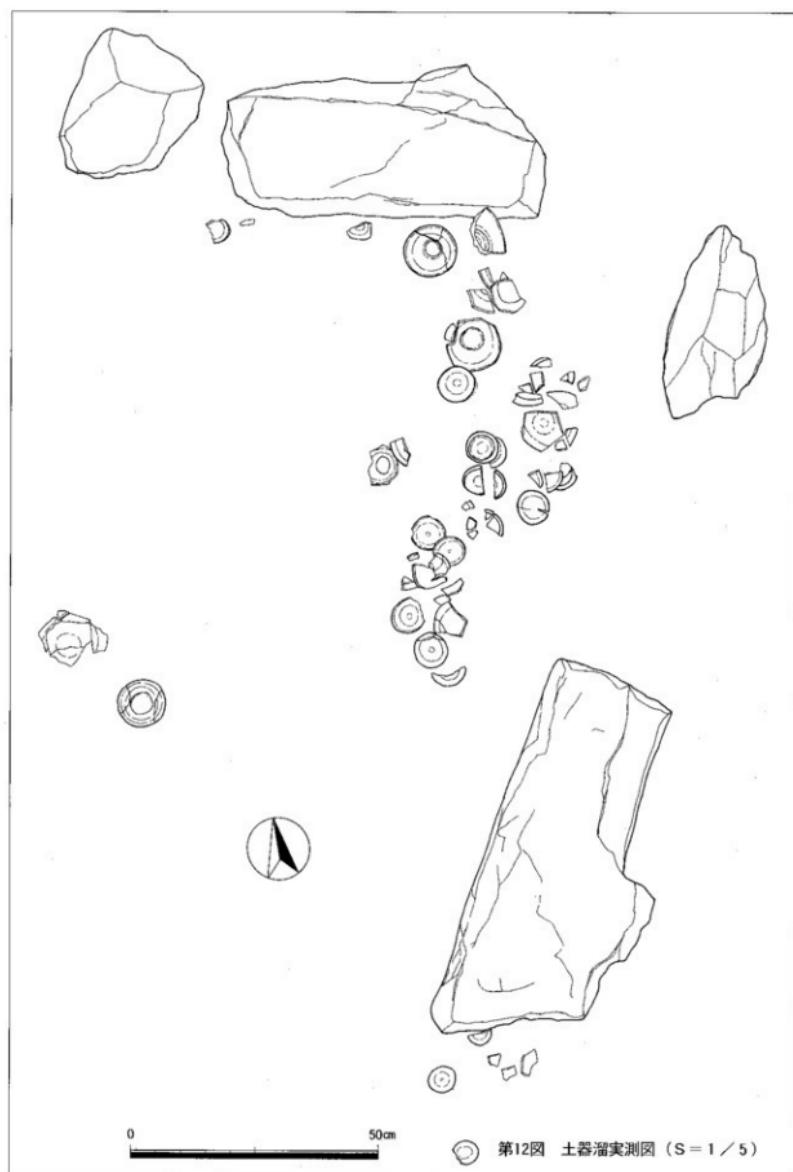
B区で確認した。検出できたのは周溝の一部と考えられ、古墳の形状、規模については不明の点が多いが、径20~30m程度の円墳と推定される。高さは不明である。主体部は消失しているため断定できないが、周辺に板石が散在しており、箱式石棺を埋葬施設としていたと考えられる。周溝は底幅約1.2mを測り、傾斜の緩やかな断面U字形を呈している。周溝内及び周辺に円筒埴輪が散在していた。検出した固体数は $30 + \alpha$ を数える。墳丘を廻堀して樹立されていた可能性も考えられる。

出土した埴輪はすべて円筒埴輪である(第11図No 8~10)。高さは34cm前後、口径20~23cmをはかる。調整は内外面ナナメハケメがみられ、2次調整はみられない。タガは2条で、突出度はやや高く、M字形を呈する。底部調整がみられる。タガ間に2個の円孔をもつ。川西編年V期のものと思われる。

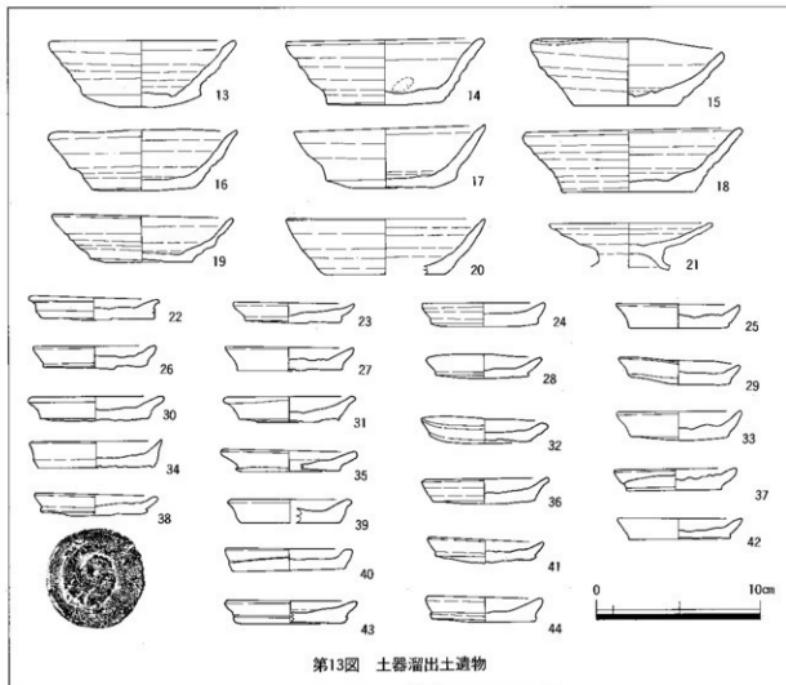
古墳の築造時期は、出土した遺物から古墳時代後期後半(6世紀後半)と考えられる。



第11図 古墳関係遺物実測図



第12図 土器窓実測図 (S = 1 / 5)



第13図 土器溜出土遺物

### 7 土器溜（SK12）第12図

B区北端で検出した。長方形の短辺、長辺各1辺ずつにあたるように石を配しているが、長方形を呈していたのかは不明である。この石の区画のなかに土師器の皿、杯が置かれていた（第13図）。土器はほぼ平面的であり、下層への掘り込みは確認できなかった。

時期は12世紀ごろのものと考えられ、遺構の性格としては、祭祀的もしくは墓的な印象を受ける。

### III 遺 物

取り上げ点数は約6,300点であるが、遺物はかなりの小片で散乱しており正確な固体数は把握できない。この小片化はB区の土師器において特に顕著に見られ、土師器の土器溜などもあり、この時期に何らかの風習があったのだろうか。またA-2区の平坦地で弥生時代前期から古墳時代の遺物が同層位で検出された。これは砂地ということで、風によって砂だけが飛ばされ、遺物のみが残ったため時期の異なるものが同層位で検出されたと考えられる。

1 縄文土器（第14図） 破片は数点出土したが、実測できたのはNa45の鉢だけであった。

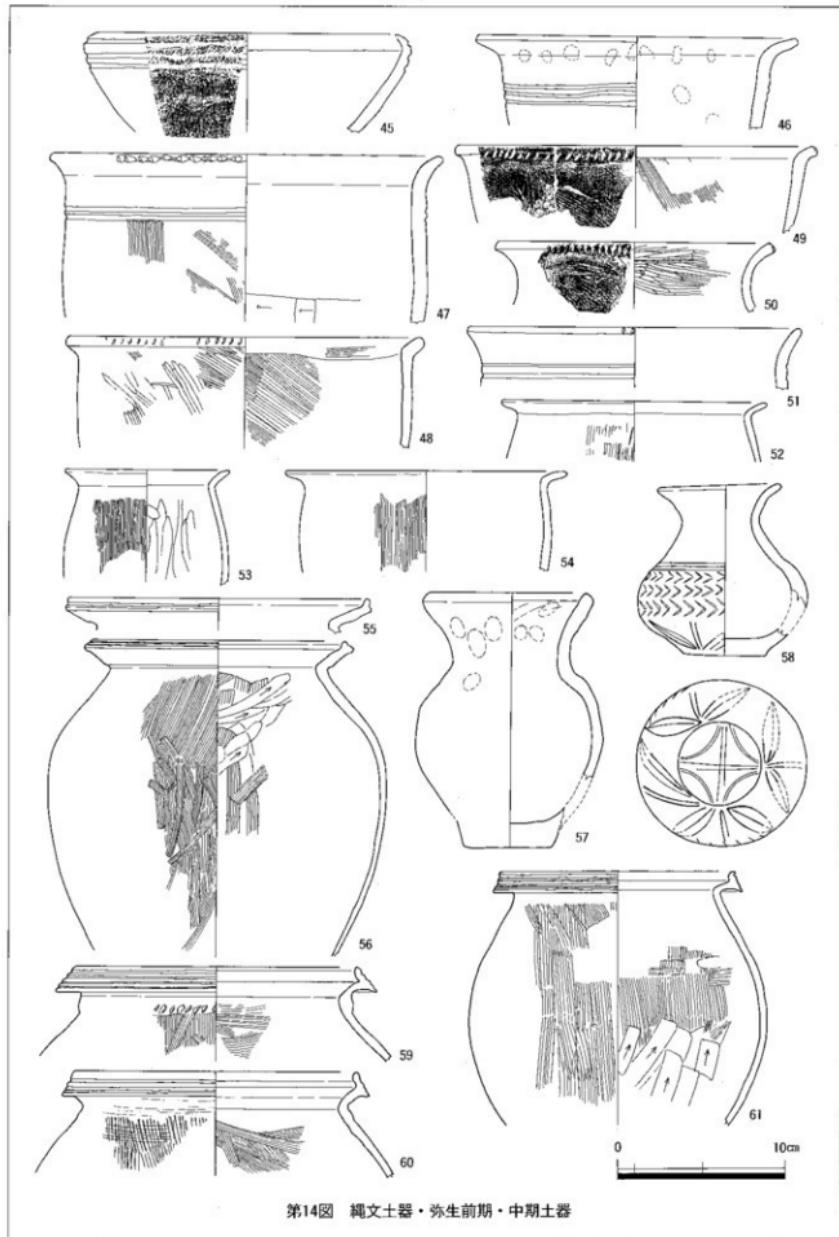
2 弥生土器（第14～19図） Na46～Na56は前期の甕、Na57・58は前期の小壺でNa58は底部に木の葉模様を施す。Na59～Na71は中期の甕、Na72～74は甕底部である。Na75・Na76は中期の壺、Na98は小壺でNa91・92は壺底部である。Na93～Na96は高杯の杯部、Na97・99は鉢、Na100～Na102・Na104・Na150は高杯脚部である。Na106～Na109は後期前半の壺、Na110～Na122は後期前半の甕であるがNa122は底部に脚の付くものと思われ、Na123～Na125は脚付き甕の高台部である。Na126～Na142は後期中葉の甕、Na143～Na145は後期中葉の壺、Na146・147は高杯の杯部、Na148～Na150は高杯脚部である。Na151～Na153は器台である。Na154・Na155は後期後半の甕である。

3 土師器（第19図） Na156～Na159は複合口縁を有する古式土師器。

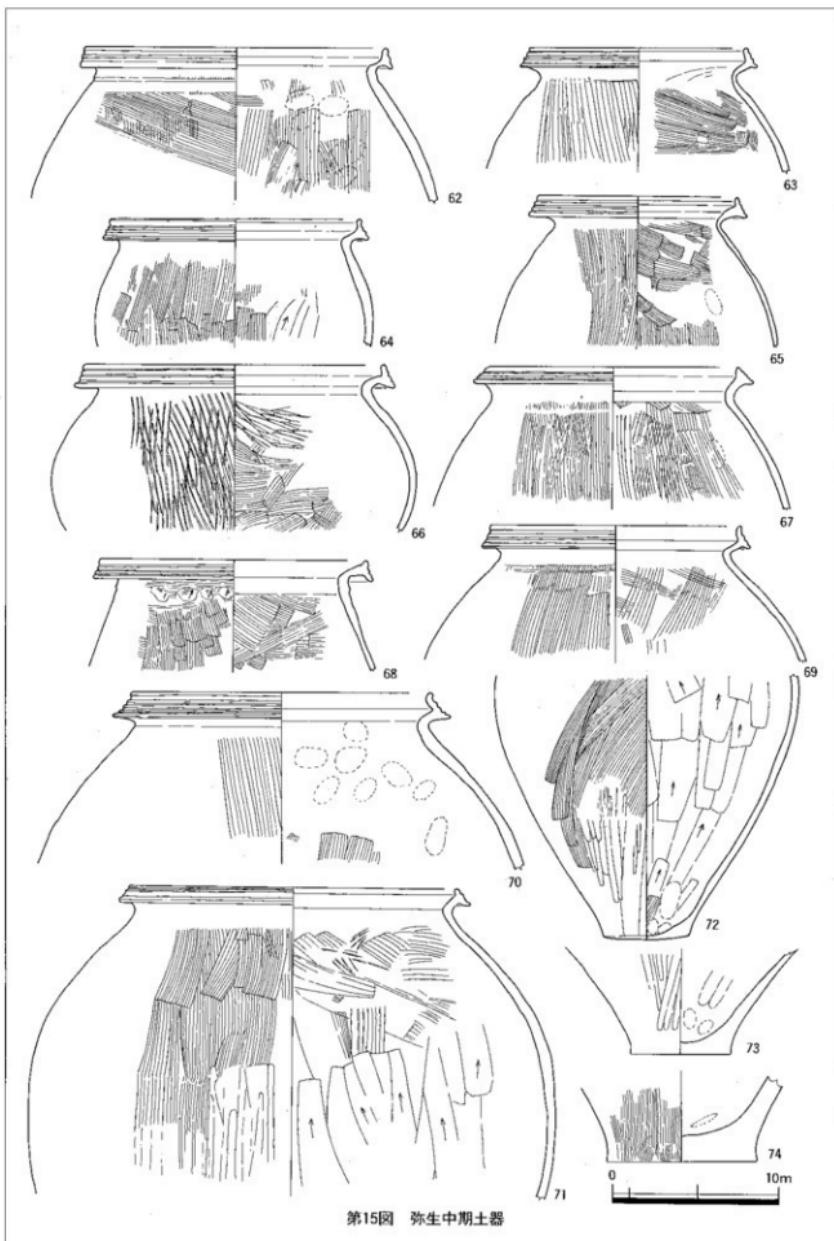
4 須恵器（第20図） Na160は杯蓋。Na161は輪状つまみ付き蓋。Na162・163・167・168は高台付き杯。Na164のすり鉢はA区畠跡で出土。Na165・166は鉢。Na169～Na173は杯で底部に糸引き痕が残る。Na174は高台付き杯の底部を硯として転用したものである。Na175は杯の底部で墨書きがある。

#### 5 土師質土器

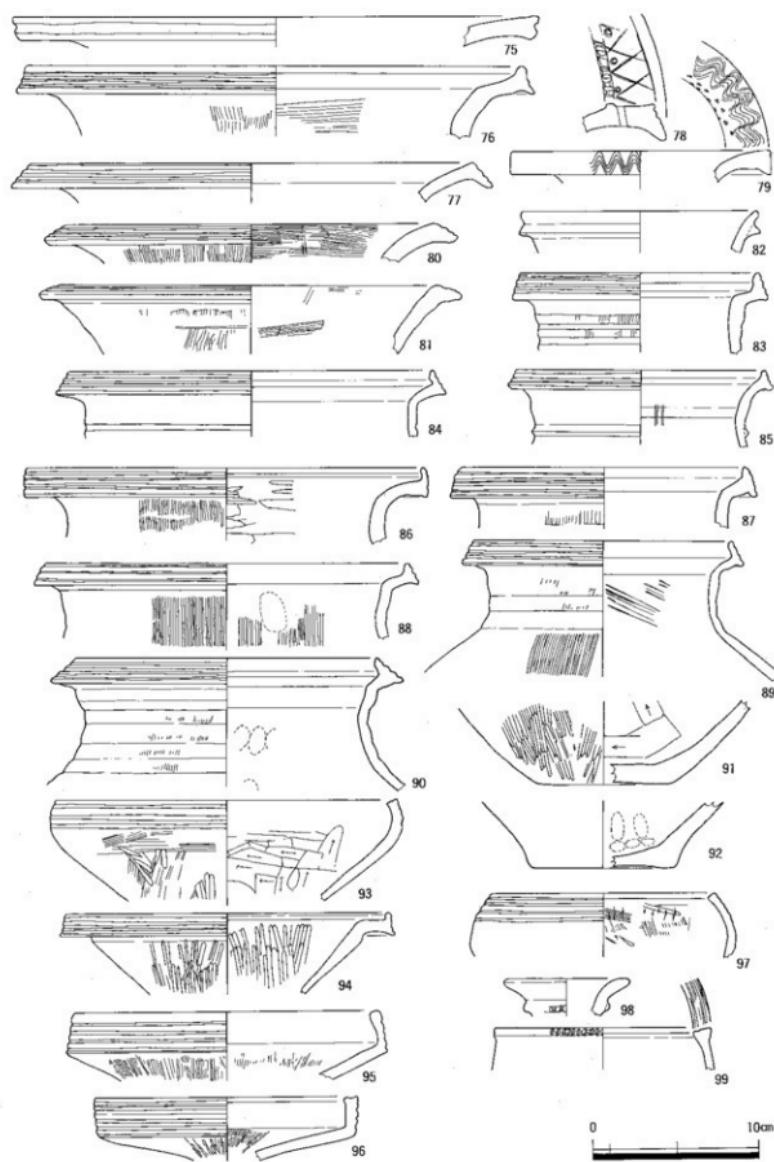
土師質皿（第22・23図） 600点以上出土。Na191～Na197はてづくねによるもので、径8cm・器高1cm前後のはぼ同じような大きさである。Na198～Na218は回転糸切りによる切離しのもので径は7～9cmであるが、Na208・Na212は径が10cm以上の中皿である。ヘラによる切離しのものは径7～9cmで、Na220～Na223は回転ヘラ切りによる切り離し、Na224～Na275はヘラ切り後ナデ調整を施す。Na245～Na259のように比較的浅い物が多く土器溜で出土した土師質皿はこのタイプであった。Na239～Na252はすじ状痕跡が残り、これは整形後乾燥を板の上で行ってついたものか、意図的に板で叩いたようにもみえる。



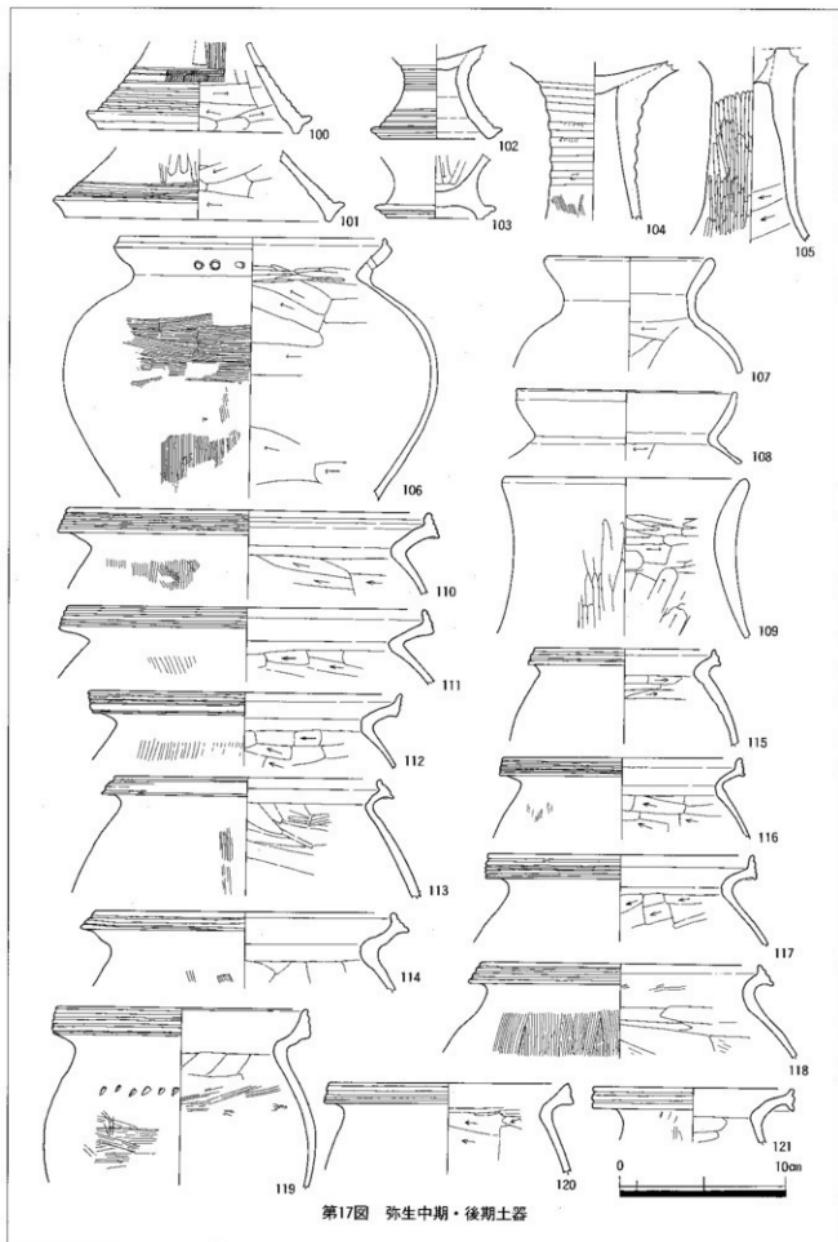
第14図 繩文土器・古生期・中期土器



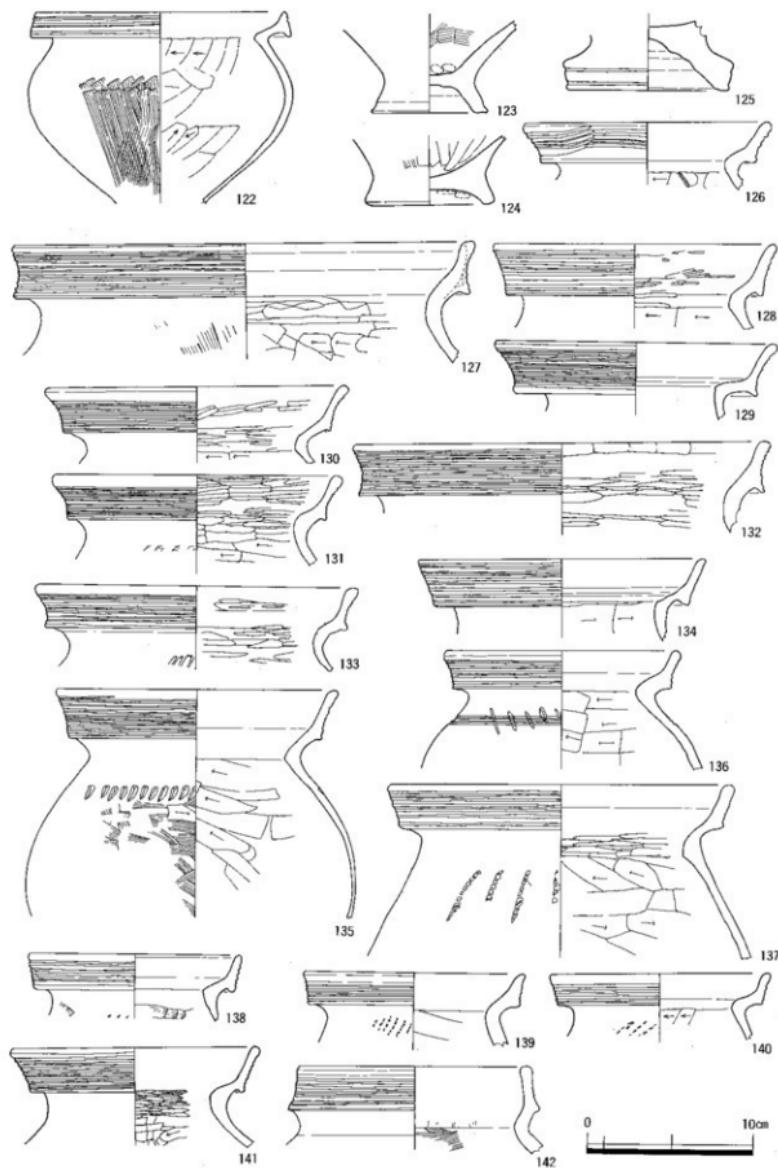
第15図 弥生中期土器



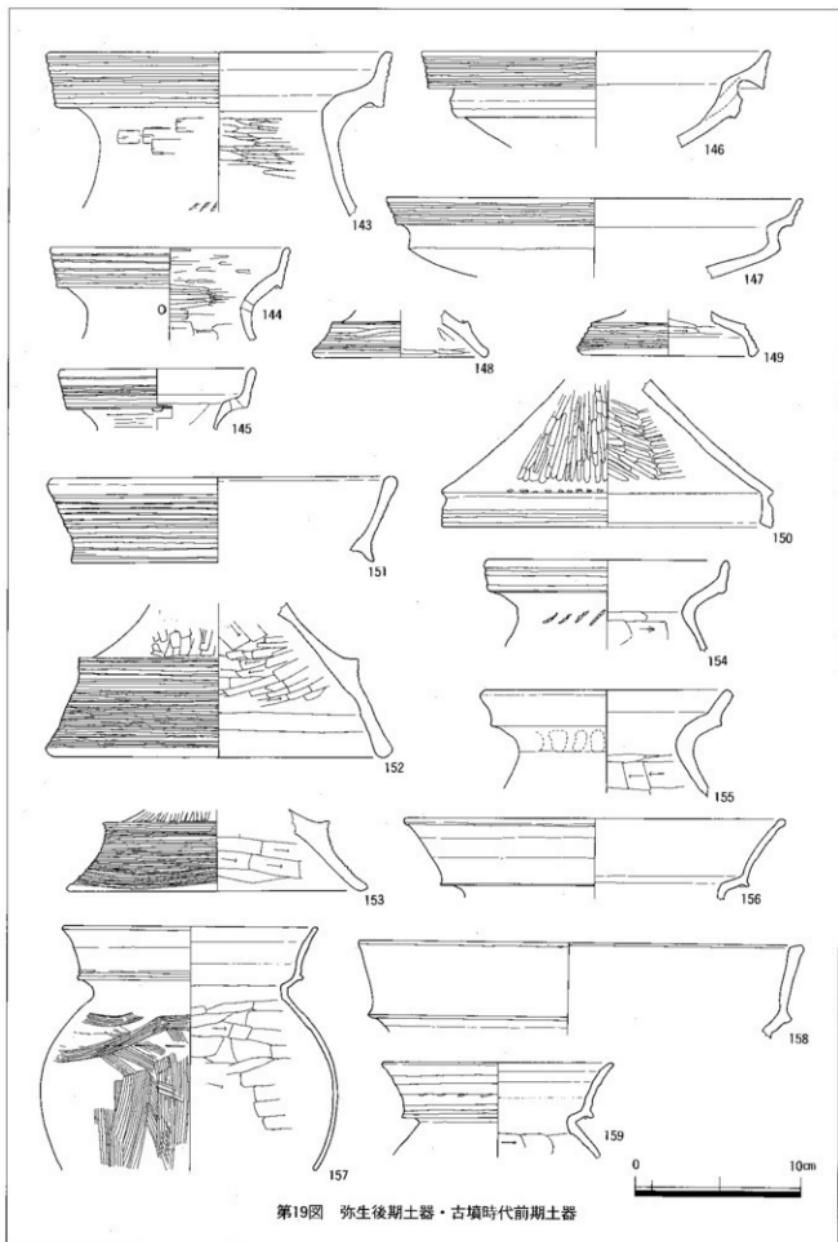
第16図 弥生中期土器



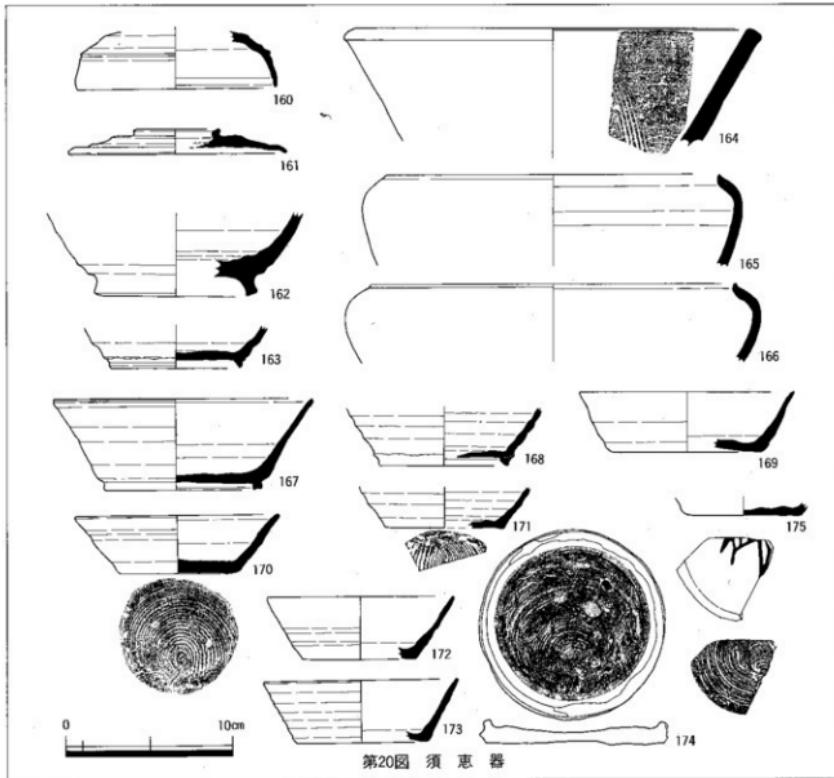
第17図 弥生中期・後期土器



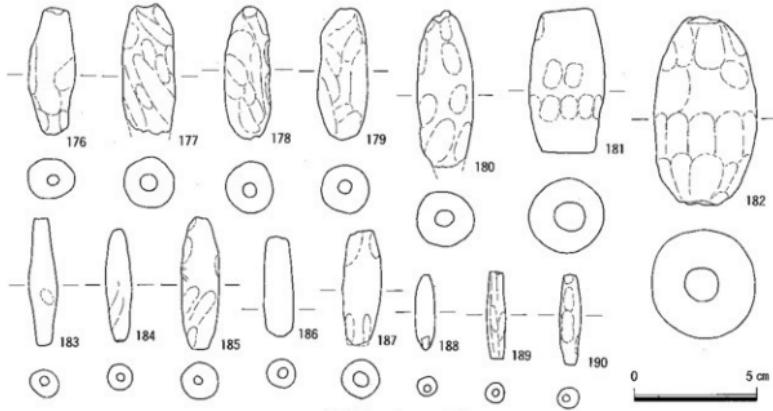
第18図 弥生後期土器



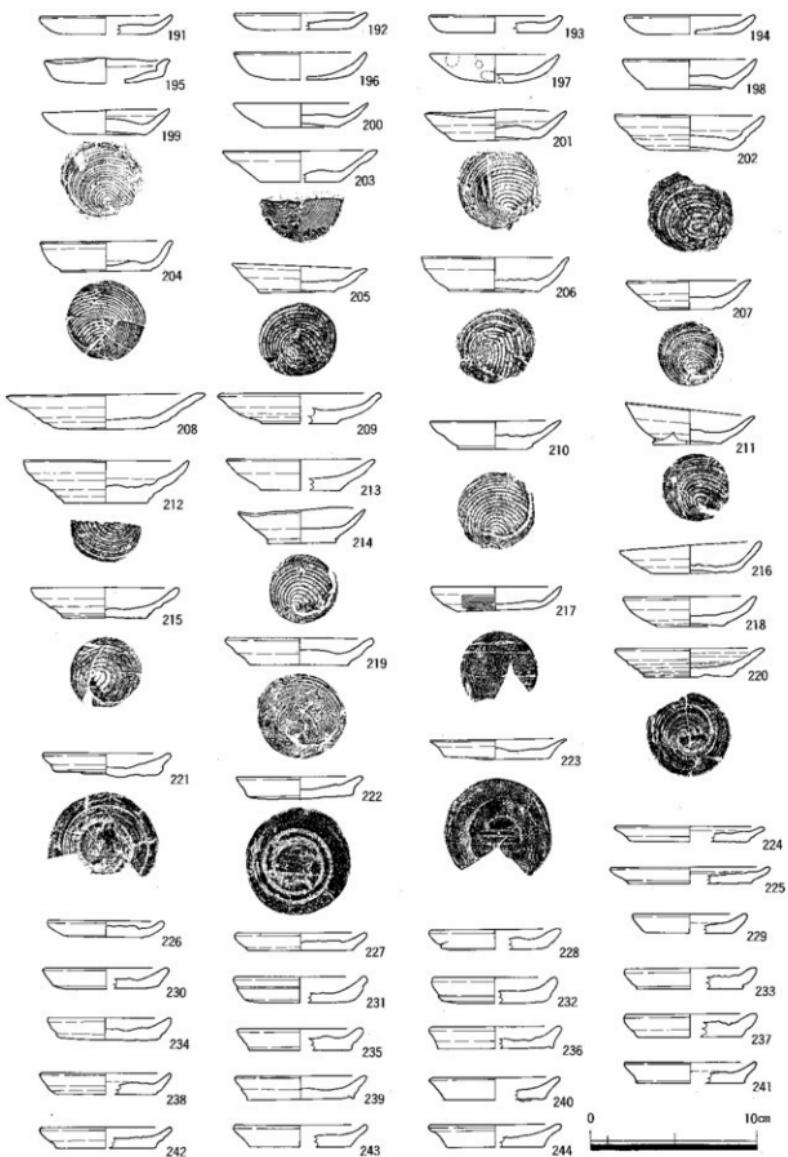
第19図 弥生後期土器・古墳時代前期土器



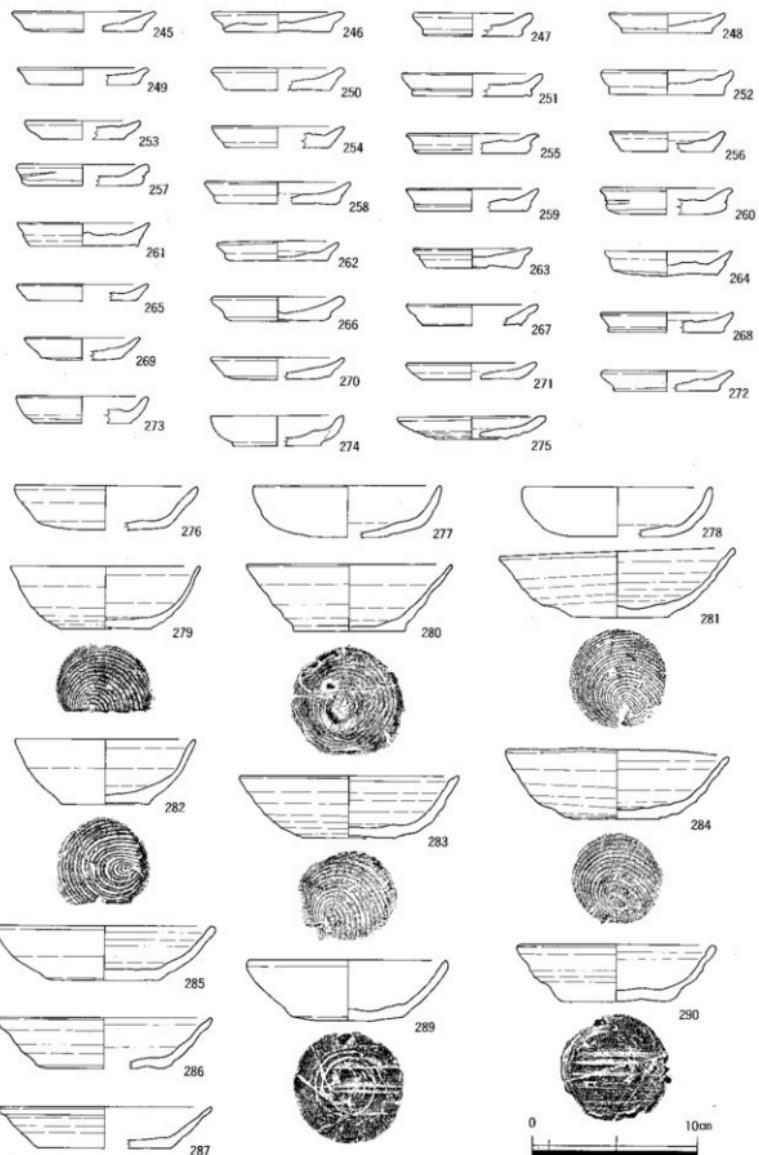
第20図 須恵器



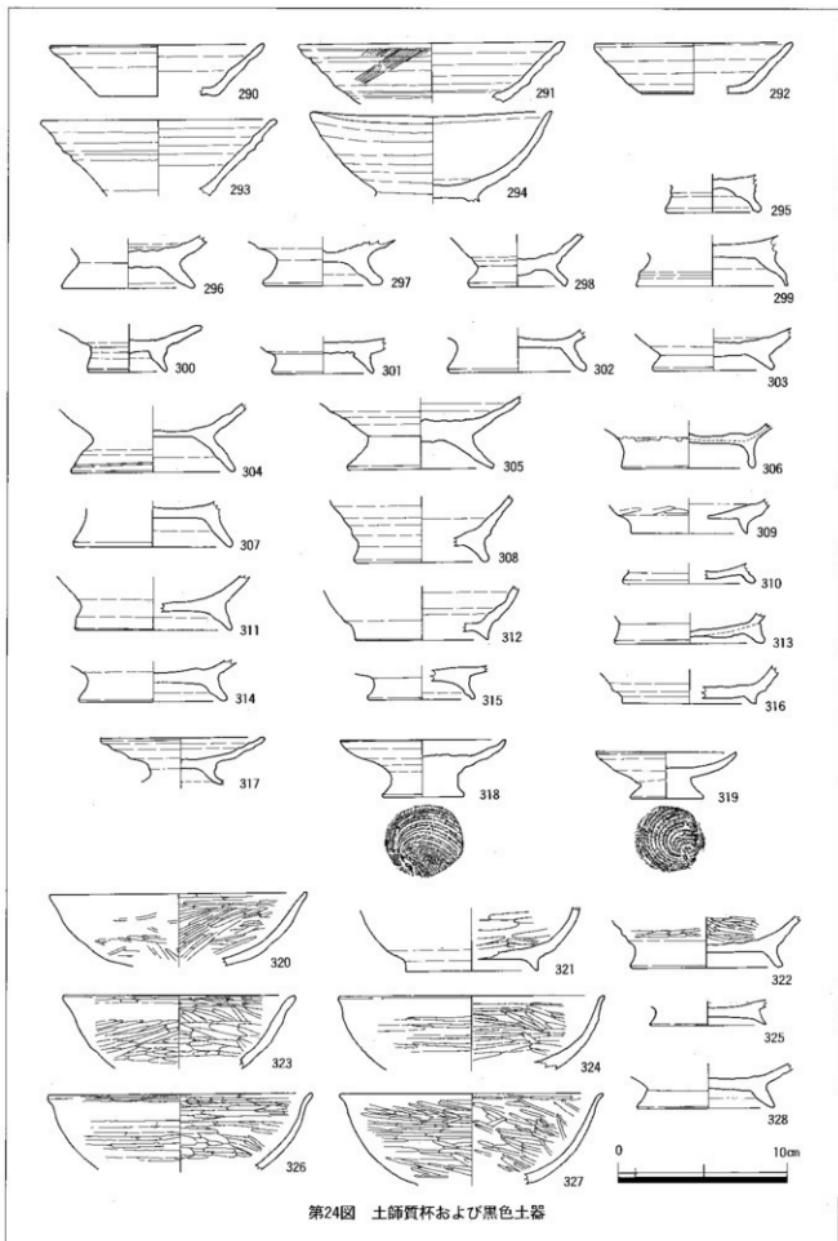
第21図 土錘



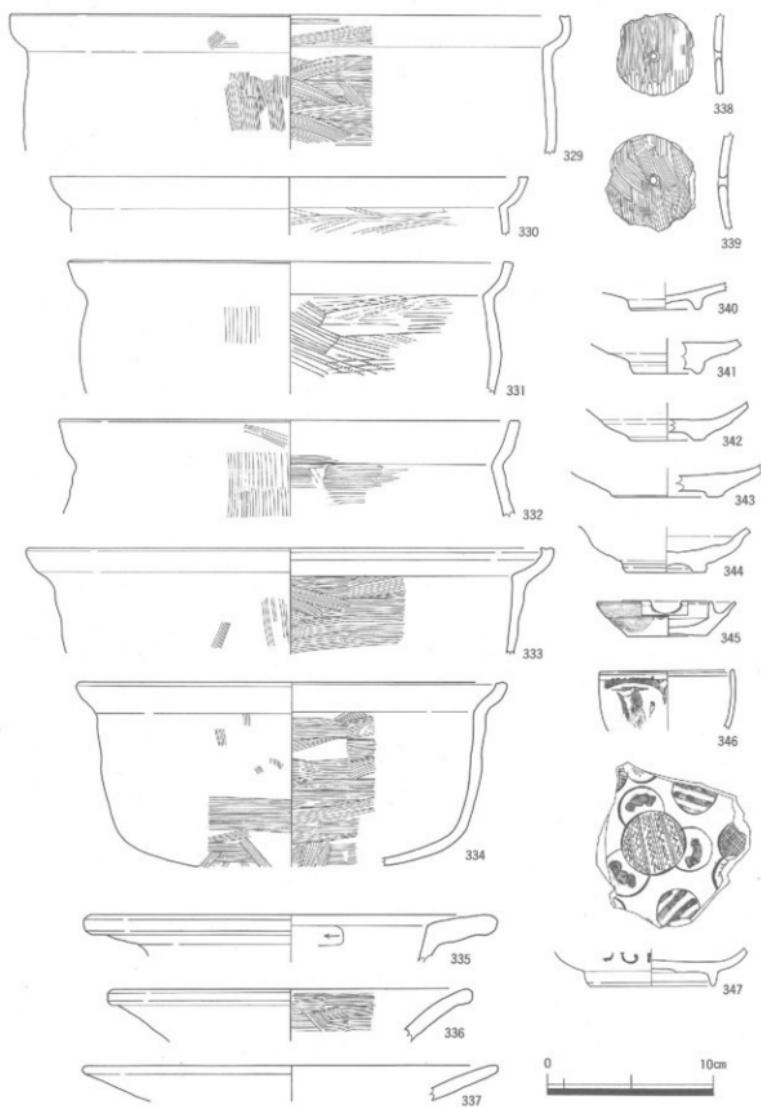
第22図 土器質皿



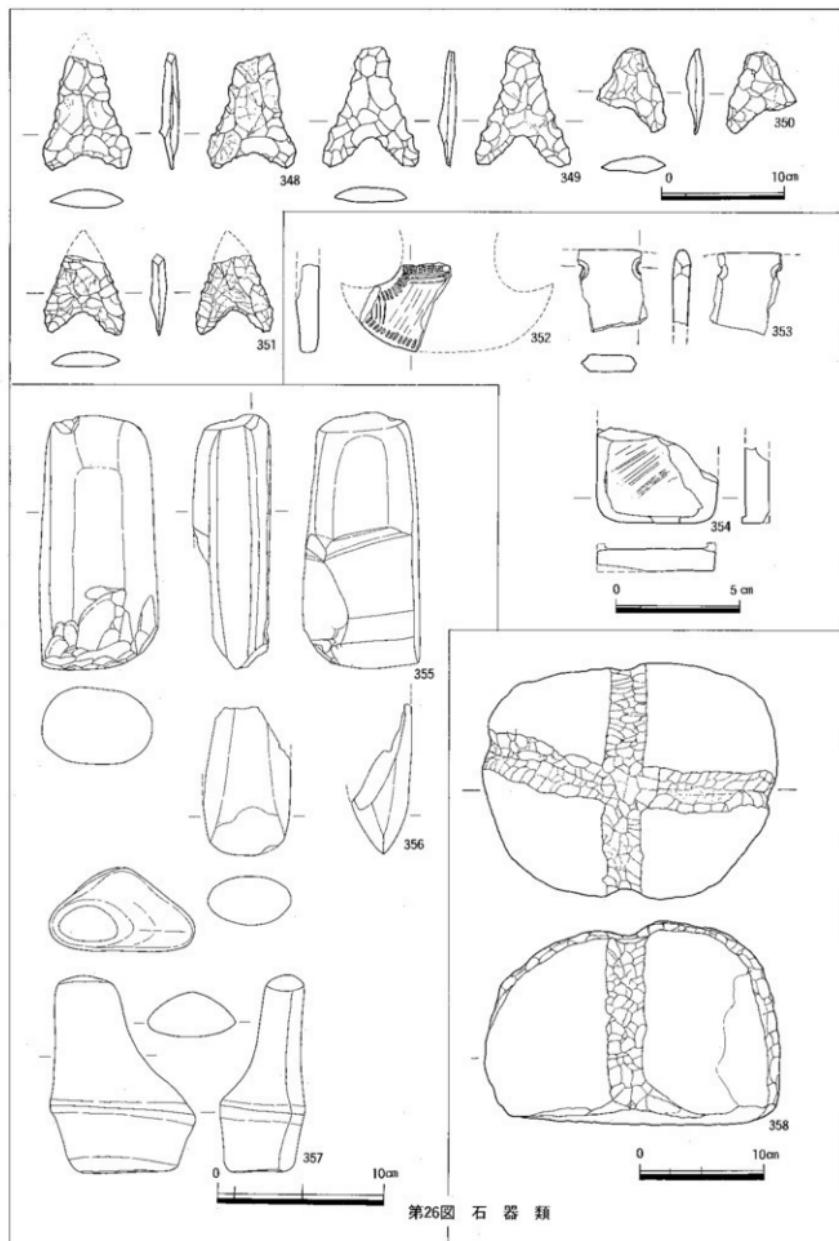
第23図 土師質皿および土師質杯



第24図 土師質杯および黒色土器



第25図 土師質鍋および陶器等



第26図 石器類

**土師質坏**（第23・24図） 700点以上出土。てづくね・平底・高台付・黒色土器の4種類に分けられる。

てづくねはNa276～Na278で径は約11cmとほぼ同じだが器高6cmと9cmの2種類がある。平底のものは切り離し方法に回転糸切り（Na279～Na284）とヘラによるものがあり、ヘラによるものはNa285～Na286のようにヘラ切り後ナデ調整を施したもの、Na187～Na290のように回転ヘラ切り後板状工具によってたたいたような調整痕が残るものもある。高台付はNa293・Na294は高台付の坏部、Na295～Na316は高台部である。Na295～Na302は大きく「ハ」の字に開く高台である。Na304・305・307などは1cm以上の高高台の部類にはいる。Na317は小型の高坏、Na318・319は柱状高台である。第24図Na320～Na328は黒色土器の坏部と高台部である。今回検出した黒色土器はすべて内面のみを黒化処理したものであった。内外面ともに磨き調整を行っているが暗紋は確認されなかった。

**土師質鍋**（第24図Na329～Na334） いずれも口縁の端部が上方にひらくもので、口縁端部屈曲に稜線をもつ。

**6 陶磁器**（第25図） Na340～Na344・Na347は皿、Na345は灯明皿、Na346は碗である。いずれも比較的上層部で出土しており、時期は18～19世紀頃のものである。

## 7 石 器（第26図）

Na348～Na351は石鎌。Na353は石包丁。Na355・356は磨製石斧である。Na357は加工してあり、細い部分を握って何かを叩く道具にもみえるが使用方法は不明である。Na358は石錘で、人頭大の石に十字の切り込みをいたしたものである。

## 8 その他

- ・土錘 全部で58点出土。細身のもの28点・中身のもの12点・太身のもの12点・特大のもの6点で、図化したものは第21図Na176～190である。
- ・紡錘車（第25図Na338・Na339）弥生土器を転用したものである。
- ・分銅型土製品（第26図Na352）
- ・硯（第26図Na358） 幅5cm弱の小型のもので墨溜りの部分のみが残る。
- ・銅鏡 北宋時代の通貨『天禧通宝（1017～1021年）』『皇宋通宝（1039年）』

## IV 小 結

今回の調査では、江戸時代の浜井戸・井戸・溝状遺構・畠跡・古墳・玉造り工房跡・柱穴などの遺構を確認した。中でも12~13世紀の畠跡は、砂丘地という特異な場所で確認されたということで、様々な問題定義を残した。まずなぜ砂地で作物を作ったか。これは現在の米子市をみても分かるように市の北部はほとんどが砂地である。その中において、今回検出した畠跡は、一般的にクロスナと呼ばれる比較的の潤滑で養分に富んだ土で形成されており、作物を栽培するのに適した場所であったと思われる。次になぜ斜面を利用したのか。これについては当初水分を嫌う作物を栽培していたのではと考えていたが、前述したようにこの畠跡では陸稲を栽培していたということで当然水は必要となる。では平地より斜面のほうが散水しやすかったのであろうか。いくら南側の斜面を利用していたとしても、海岸に近く風の影響を受けやすいこの地で作物を栽培する必要があったのだろうか。現在のところクロスナの分布状況が不明であるが、この場所しかなかったのか、あるいはこの場所にまで耕作地を広げる必要があったのか、当時の政治・人々の生活と密接な関係があつたのであろう。そして何故この地が放棄されたのか、災害史との関係も生じている。今回の調査も含めて現在のところ当時の人々の生活の場等の調査は行われていない。今後の調査及び、地質的調査が行われることによって少しでも解明されることを期待する。

次にB区における遺物の細片化という問題がある。コンテナ30箱分もの土師質皿・壺の小片が意味するものはなにか。自然に割れたものとしては余りにも細かすぎ、何か意図して割った祭的な意味合いを感じられる。これらとほぼ同時期のものとして、ほぼ完形品の土師器の皿と壺が集中して出土した部分がある。これらも何か祭的な意味合いがあるようでお互い何らかの関係を考えられる。

最後に今回の調査地では多量の弥生時代の遺物も出土しているにもかかわらず、遺構が全く確認されなかった。また周溝のみであるが古墳も検出している。これらのことは少なくともこの周辺において弥生時代から継続して、生活の営みがあったことがうかがえる。周辺が市街地ということで調査が行われにくい地域であるため、まだそれぞれの調査が一つの点に過ぎないため問題点が多く残る。今後何らかの形で調査が行われ、今回の問題点が一つでも解明されることを希望する次第である。

報告書抄録

フリガナ	ニシキマチダイイチイセキ						
書名	錦町第1遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	17						
編著者名	平木裕子						
編集機関	(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室						
所在地	〒683 烏取県米子市中町20 TEL (0859) 22-7209						
発行年月日	1996・3・31						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ニシキマチダイイチイセキ 錦町第一遺跡	ヨナゴシニシキマチ 米子市錦町 1丁目139-1	31202	35°25'55"	133°19'10"	19950515 19950819	1.000	建物新築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
錦町第1遺跡	畠地	鎌倉時代	畠跡	須恵器			
	古墳	古墳時代	古墳周溝	須恵器 埴輪			
		弥生時代		弥生土器 石斧			
		中世		土師器			

# 図 版

図版 1



作業風景



A区 岩跡



B区 岩跡



A区 SD-03・04

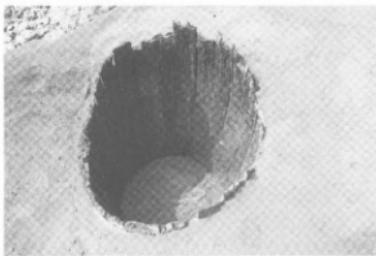


B区 SD-11

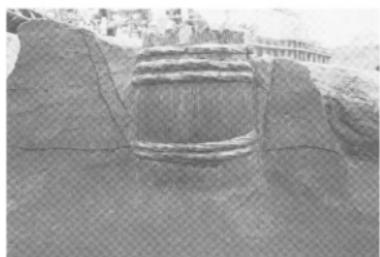
図版 2



井戸 2



井戸 3



井戸 2 断面



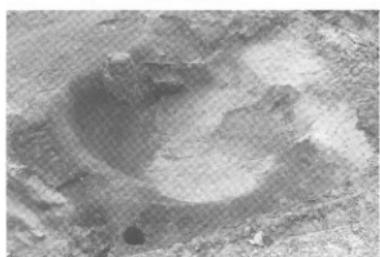
井戸 3 断面



SK-02断面



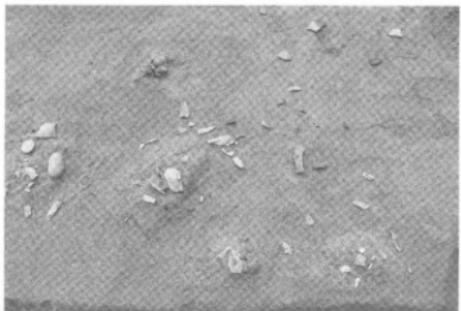
SK-08



SK-07



SK-08段階



玉造り工房跡  
(緑色凝灰岩チップ散乱状況)



土器溜



埴輪出土状況

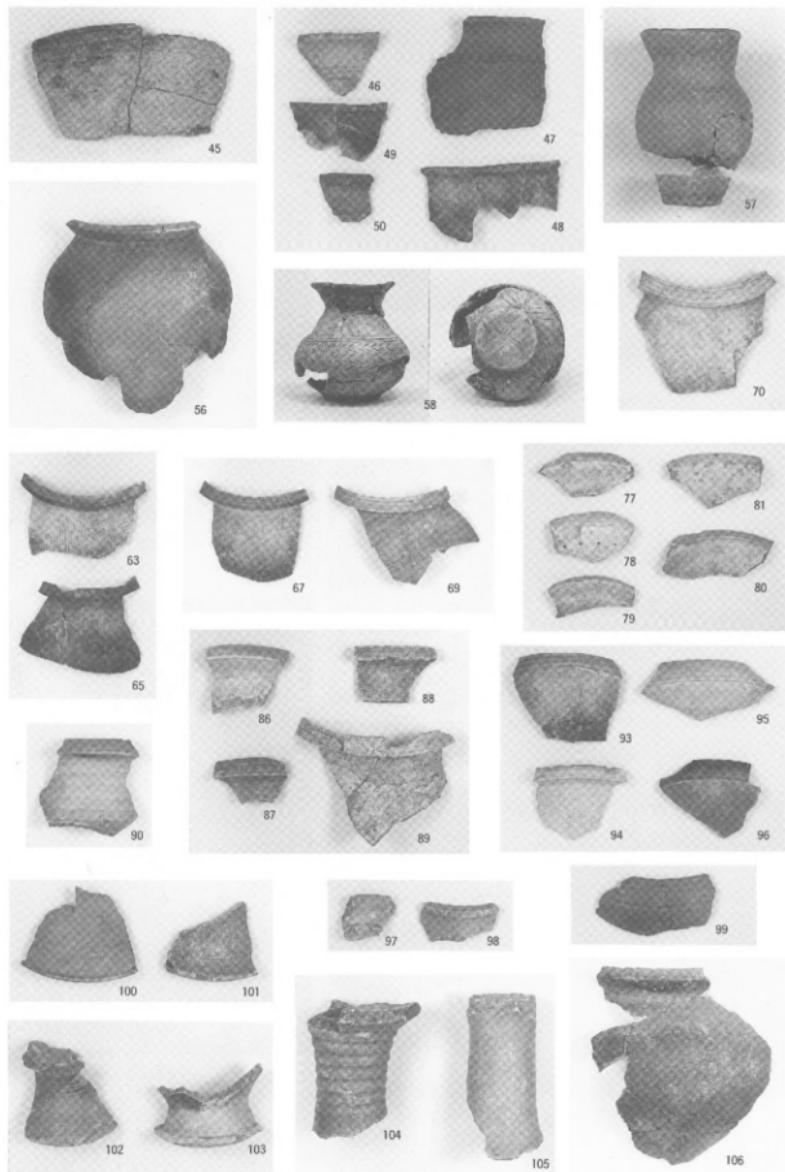


土層断面



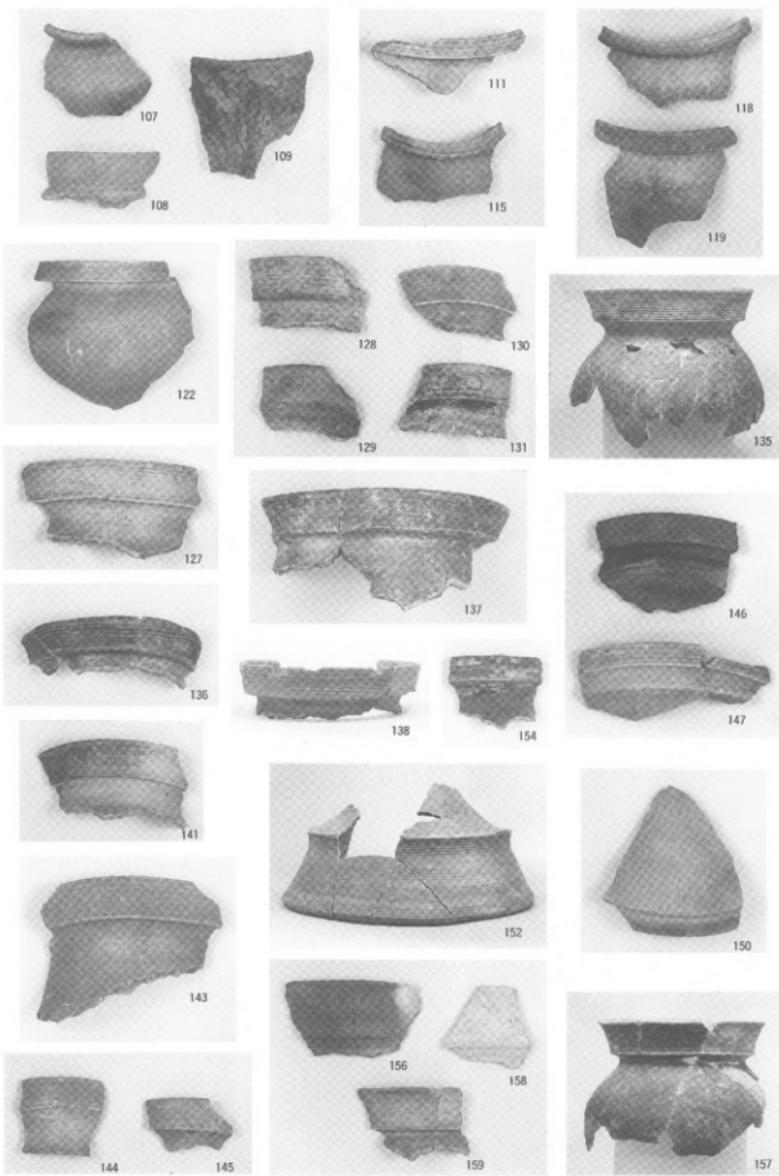
B区土層断面

図版 4



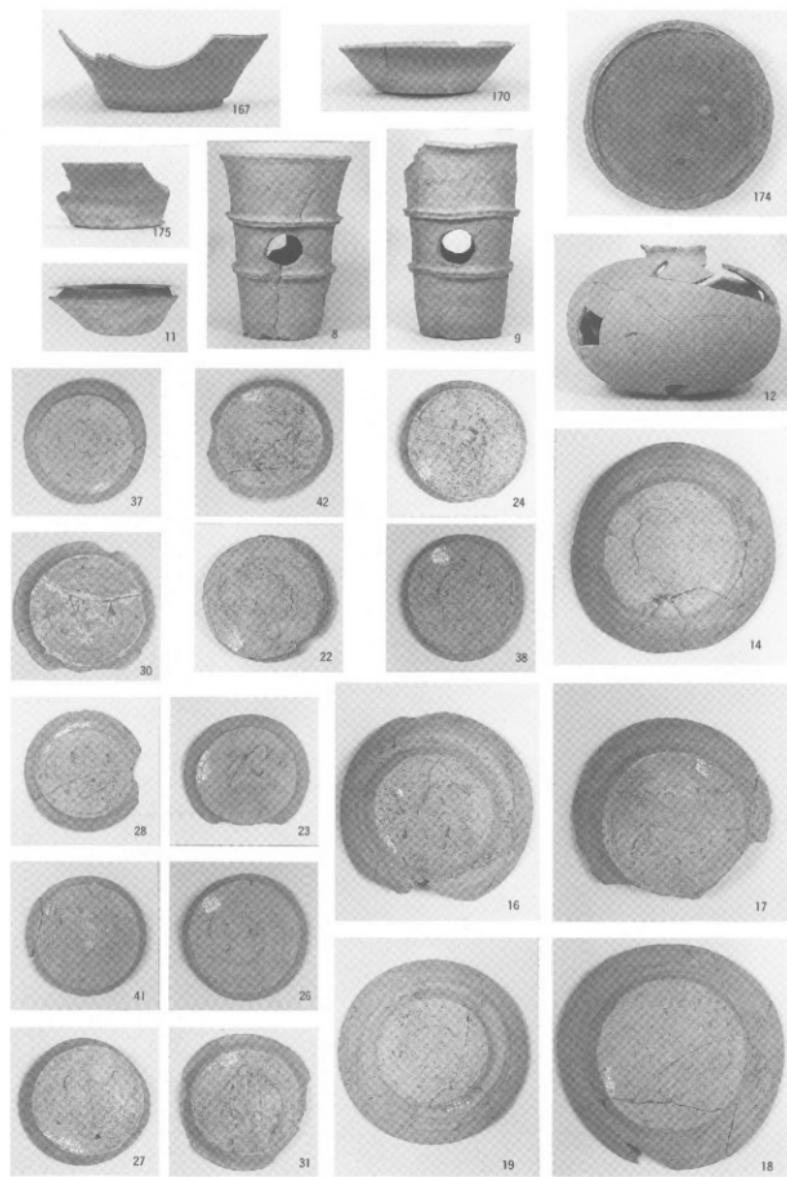
縄文土器・弥生土器（前期・中期）

図版 5

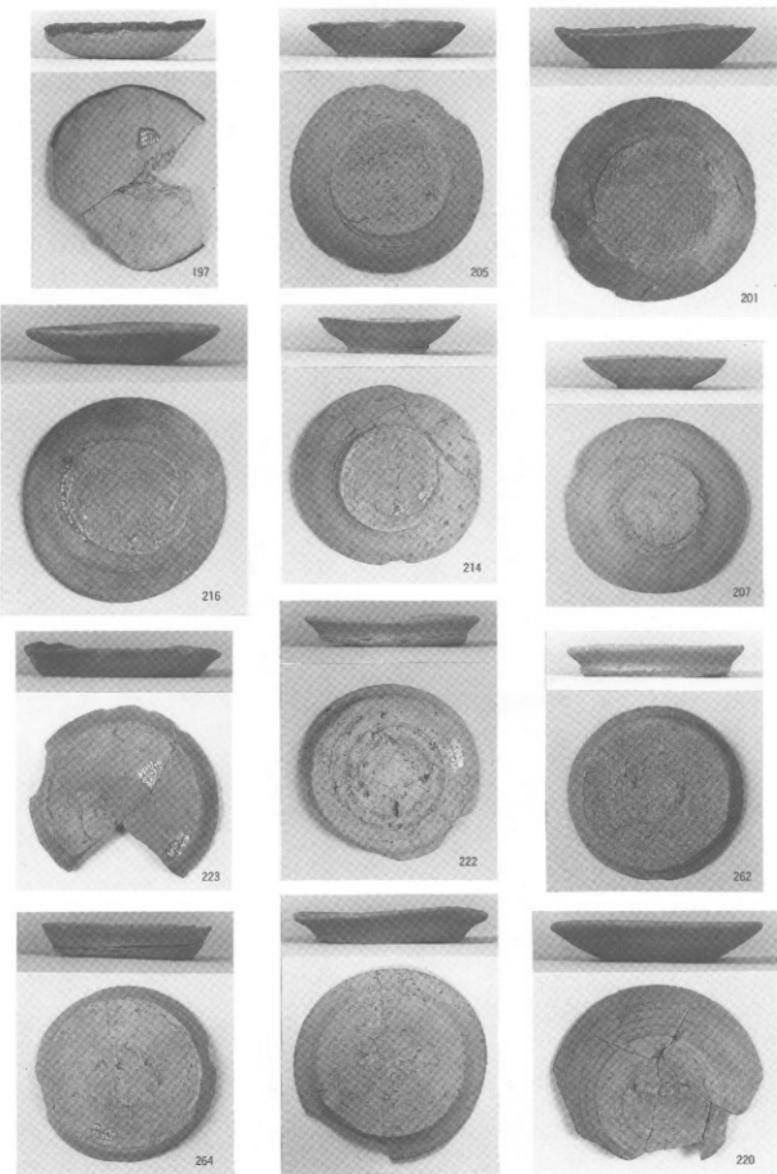


弥生後期土器・土器

図版 6



須恵器・埴輪・土師質土器（土器溜）



土質土器

図版 8



土師質土器・石器類

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 17

錦町第一遺跡

発行 1996年3月

発行者 財団法人 米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

〒683 烏取県米子市中町20 TEL0859-22-7209

印刷 (有)米子プリント社

〒683 烏取県米子市旗ヶ崎2218 TEL0859-22-2155